ジェイムズ・バカン著「真説 アダム・スミス －その生涯と思想をたどる －」
日経 BP 社 2009 年 6 月 29 日刊を読む

「同感」の作用が社会全体を導く基本的な原理

1．大都市の住んでいて、みずからの富を自由に使って人生の贅沢や上品さを追究できる人、みずからが求めたとき以外には公の職につく必要がない人にとって、人間の心の動きに関心をもつのが自然であり、関係者のさまざまな感情が各人の行動に与える影響をみていけば説明できる点が、もっとも趣味にあうことになろう。
　「そうした人が関心をもつのは主に、感情であるはずだ」

2．「道徳感情論」は、ある行動が善である理由、ある行動が悪である理由を説明しようとしているのではない。外部の権威を排除した世界で、ある行動が善であるという感情、ある行動が悪であるという感情がどのようにして生まれるのかを説明しようとしているのである。人間にとって、時代を超えて通用する善悪の原理を探求しているのではない。人間が個々の事例で、善悪をどのようにして判断するのかを、理論的に把握しようとしている。たとえば、女性が貞淑でなければならない理由を説明するのではなく、女性は貞淑であるべきだと男性が感じる理由を説明する。

3．人間はどれほど利己的だと考えられるにしても、その性格には明らかに何らかの原理があって、他人の運命に関心をもつし、他人が幸福であることが自分にとって必要なのである。

4．人はまず、他人の道徳性について判断を下し、その結果を使って、自分について判断を下す。人は他人の立場に立って考え、「同感」または「共感」を使って、ほんの一瞬にすぎず、ごくわずかにすぎないとしても、他人の行動の背景にある感情を実感しようと試みる。同感によって、人は金持ちや成功者がいかに幸せかを想像し、金持ちが作りだす流行を追いかける。ただ生きていけるだけでは満足せず、もっと高い目標を目指す。社会にある階級の違いを受け入れる。自分の感情とどこまで一致しているかで、他人の行動や意見の正しさを判断する。「適正さ」を判断する。

5．他人の行動や意見を同感によって判断する際には、経験と規則を組み合わせて適切な判断を下す。これを「公平な観察者」と呼ぶ。この判断の結果を自分自身に適用して、正しい行動や義務についての感覚を獲得する。いいかえれば、人は他人を見て、道徳的な行動をとる人間としての自分自身についての見方を獲得する。これをキリスト教と呼ぶのであれば、裏返しのキリスト教だといえる。自分自身を愛するように隣人を愛せ、というのがキリスト教の偉大な法則であるように、隣人を愛する以上に自分を愛してはならない、というのが自然の偉大な戒律である。

6．プラトンはこう語った。「魂はみずからを知ろうとするのであれば、魂をよく観察しなければならない。人は他人がどう感じているかを直接に感じ取ることはできないので、自分が同じ立場にお

かれたときにどう感じるはずかを想像してみなければ、他人がどう感じているのかを知ることはできない。」同感という言葉は、他人に対する哀れみや同情だけではなく、「どのような感情によるものであれ、他人への共感を意味するものとして使える。」同感は自然に起こるものであり、無意識にすら起こるものである。たとえば、群衆は、ゆるく張られた網の上で踊る踊り子を見つめているとき、自然に身体をくねらせ、ねじらせてバランスをとる。踊り子の動きを見て、自分が同じ立場にたったときにどうしなけれなばらないかを感じとり、身体が自然に動くのである。

7．このようにサーカスや大道芸で確認した同感を、道徳の分野にもちこんで考える。人は他人の行動を判断するとき、結果がどうなるかだけを考えるわけではない(ヒュームが論じた通りだ)。現代の例をあげるなら、宝くじで一攫千金(いつかくせんきん)を狙う人を見て、宝くじを買うのに使った金の一部が美術館の建設に使われるのだからという理由だけで、価値のある行動だと考えたりはしない。人は他人の行動の動機や適切さを考え、他人の行動が適切だと判断するのは、自分が同じ立場におかれたとすればもつであろう感情と一致したときだけである。他人の感情や情熱に同感できれば、適切だと判断する。同感できなければ、適切ではないと判断する。

8．以上を前提に、スミスは大量の社会現象をつぎつぎに取り上げていく。どれも、それ自体で同感は社会の秩序と繁栄に役立つものである。●●●●●するためには、感情を調整しなければならない。観察者は、同感の感情の調子をできるだけ高めようとし、感情をあらわしている本人は感情の調子を抑えて、観察者の水準にあわせようとする。こうして、「穏健な調子」に達しようと、観察者も本人も努力し、ここから、あらゆる種類の社会的な美徳がただちにあらわれてくる。同感する側には、他人への思いやりと慈愛心があらわれ、同感される側には、自制心と克己心があらわれる。

9．他人が感情を示したとき、人がそれを容認するのは、同感できたときだけである。痛みや恐れで悲鳴をあげるのがみっともないのは、本人が感じている苦痛や恐怖心の強さに見合うほど同感できるとは、観察者が期待できないからである。性的な感情の表現はとくに、同感が難しい。「この感情は恋愛感情とまじりあい、おそらくは恋愛感情の基礎なのだろうが……、醜悪であり」、それがすぐにも満たされるものとして表現されれば、不快である。異性への愛情は、本人以外にはつねに、「対象になっている人の価値に、まったく釣り合わない」ように思える。恋愛感情を他人に表現すると、自嘲気味に話さないかぎり、馬鹿げているという印象をもたれる。

10. 人は友好的な感情、善意の感情の表現に対して、恨みや憎しみの表現、利己的な喜びや悲しみの表現よりも強く同感するし、小さな不満を延々と並べられれば、観察者はうんざりする。

11. 小さな不快なことがあるたびにいらだつ人、料理人や執事が仕事のささいな点で失敗したときに感情を害する人、最高の儀礼を要する儀式で、自分に対してであれ他人に対してであれ問題があれば、すぐに見つけだす人、午前中に親友に会ったとき、おはようといってもらえなかったと気にする人、自分が話をしているとき、弟が鼻歌を歌いつづけていたと不愉快になる人、田舎にいるときに天気が悪いとか、旅行のときに道路が悪いとか、都会にいるときに仲間がいないとか、遊びにいっても面白くないとかで気分を害する人、こうした人は、本人にすれば何らかの理由があるのだろ

うが、同感を得られることはまずない。

古代に修辞や倫理を論じる際に使われた性格(キャラクター)という概念が、近代になって、小説の登場人物(キャラクター)を意味するようになるのだが、スミスはこの意味の変化で、重要な位置を占めている。

12. 人は行動の結果よりも動機を重視し、行動の利点よりも適切さに関心をもつ。感情の適切さや行動の利点に関しては、良心がどう判断するかを考えるのではなく(日曜学校ではそう教えられるだろうが)、社会がどう判断するかを考える。社会の見方に敏感になることで、人は自分自身の外見や行動を観察し、判断を下すようになる。

13. ヒュームは、二枚の鏡を向かい合わせたように、同感が人と人の間で反射すると書いている。社会とは、鏡であり、これがあるからこそ、人はある程度まで、他人の目を通して、自分の行動の適切さを吟味できるのである。自分の顔は、鏡で見えるもののなかでもっとも快い対象になり、すぐに見あきることのない唯一の対象である。

14. しかし、社会という鏡は暗いし、歪んでいる。重要だと思える点になると、ほとんどいつも、友人や家族、隣人がみな、無知だし、見方が偏っているし、公平ではないと感じる。そこで、人は周囲の人たちが実際に下した判断にしたがうのだが、もっと上級の裁判官の判断をあおぐこともできる。すべての事情に通じ、公平無私な想像上の観察者、つまり胸中の人の判断である。この「胸中の人」は、なすべきこと、なさざるべきことに関する一般的な規則を集めたものであり、世間の判断の誤りと自分自身の自己欺瞞の間で、ある種の理想的なバランスをとったものである。スコットランドの国民詩人、ロバート・バーンズはこれを、「おお、何という力を授かっていることか。他人が見る目で自分を眺められるとは」とうたっている。モーヒリン教会でかわいい女の子の帽子に虱(しらみ)がいるのを見て、うたった詩の一節である。適切さや正しさは、「公平な観察者が是認する感情の程度」によって決まるのである。

15. 「道徳感情論」の良さは、独創性、民主的で反権威主義的な性格、楽観的な見方にある。自分自身について、善悪についての見方を他人から得るという考え方は、道徳感覚から得るという考え方より理解しやすい。道徳感覚という概念は、ごく最近になってようやく作られたものだ。感情を他の要素から切り離して細かく分析していくのは、潜在意識の時代には少々古いとも思えるだろう。しかし、社会についての見方はまったく近代的だと思える。膨大な量の刺激と反応のネットワークでできあがっていて、上からの指示も下からの支えも必要としないのだから。

16. 「道徳感情論」の欠陥はある種、格式張ったところにある。育ちの良さが重視されて、道徳が消えているのである。当時のスコットランドは地獄の業火(ごうか)を説く野外集会、酒と短剣の世界から抜け出したばかりだ。スミスが敬愛した古代ギリシャの哲学者は、あらゆる点で行きすぎを避けるよう教えている。二世代後のスコットランド人が夢中になった激情は和らげられ、異性に対する情熱は無視されている。

17. スミスは母親に強い愛情をもちつづけ、古代の世界に憧れていたので、異性におぼれるとは、プ

ラトンと同様に考えにくい。18 世紀にはスコットランドで激しい対立が収まり、家庭が大切にされるようになって、いわば自然の流れとして女性が崇拝されるようになるのだが、スミスはこのような風潮とは無縁だった。ハチソンは異性への愛の倫理的な価値を賞賛したし、ファーガソンは中世の騎士道を礼賛したし、ジョン・ミラーは性の政治史を書いたし、バーンズは放蕩を正当化したが、スミスにはこうした面はなかった。

18. 女性が慈悲心をもてるのは「繊細な共感」による場合だけであり、その際には、自己否定も、自己統制も、適切さの感覚も必要としない。男女間の感情についていうなら、愛情は自然だし、人生のある時期には適切でもあるが、同時に、「弱さ」を示すものでもあり、古代ギリシャのスパルタ人やアメリカの先住民族は「許しがたい柔弱さ」を示すか、「あさましい必要」によるものだ。
　想像力の働きによって、無知とも偏見とも無縁な観察者を思い描くことができる。書斎の窓からは草原や森、遠くの山が小さく見え、二次元の平面のように見えるが、これを想像力の働きで、三次元の大きな光景として認識しているのと同じだ。「ほんとうの高潔さと意識的な美徳は、人びとに反対されてもびくともしません。」

19. 人びとは賞賛するかどうかを判断するが、公平な観察者は賞賛に値するかどうかを判断する。
　外部の人の裁判権はすべて、実際に賞賛を受けたいという欲求と、実際に非難を受けることへの嫌悪とに基づいている。内部の人の裁判権はすべて、賞賛に値することへの欲求と、非難に値することへの嫌悪に基づいている。つまり、他人を見たときに愛し、憧れるような性質を自分がもち、そうした行動を自分がとりたいという欲求に基づいており、そして、他人を見たときに恨み、軽蔑するような性質を自分がもち、そうした行動を自分がとることへの嫌悪感に基づいている。

20. 公平な観察者、いいかえれば内部の人は、たえず性格や行動を観察し、実践を積み重ねることで、経験豊富になり、信頼性が高くなる。「ゆっくりと、時間をかけて、前進を続けていくのであり、これを行うのは胸中の偉大な神人、行為の偉大な裁判官、調停者である。……毎日、何らかの特徴を改善し、何らかの欠陥を修正していく。……自分の性格をできるかぎり、完全性の原型に近づけようと努力していく。つまり、善悪の基準があり、それは、他人への同感や他人の同感よりもかなり洗練されたものなのである。」

21. 一方、神の法を人間世界の仕組みに置き換え、教条的な道徳の体系を社会の想像上の判断に置き換え、スミスは社会が操作される余地を残す習慣が道徳に悪影響を与えうると警告する。たとえば、中国や古代ギリシャには、望まぬ子供を棄てる習慣があったし、そこまでおぞましくはないが、全寮制の学校に送る習慣や、海外を旅行させる習慣がある。

22. 金持ちや好運な人にいつも憧れ、賢い人や親切な人を軽視する社会に、つねに不安を感じる。スミスは「天が怒って、野心を与えた」貧乏人の息子の物語。息子は金持ちになろうと努力するが、金持ちというのは要するに、巨大で手のかかる機械だが、わずかばかり、つまらない利便品を生産するにすぎない。……巨大な建造物であり、一生涯働きつづけなければ建築できず、そこに住んでいると、いつ崩れてきて押しつぶされるかわからない代物である。

23. この問題からの脱出口は道徳ではなく、社会である。裕福さというのは「惑わし」にすぎないが、裕福になろうと努力するために、人びとは働きつづけるのである。そして、富と家柄に対する尊敬の念で、社会の階級が確立し、秩序が維持される。いずれにせよ、「民衆の大群」にとって、金持ちと家柄のよい人を見分ける方が、「徳の違いという目に見えず、不確かなことが多い点」を判断するより容易である。社会は愛情や義務によってではなく、「相互に合意した評価にしたがった金銭的な交換によって、他人の助けを得ること」で維持されうる。

24. 金持ちは馬鹿げた生活を送っているのだが、通貨と自由な商業の作用のために、みずからの富の一部を貧乏人に分けざるをえない。

……金持ちは大量の生産物のなかから、とくに貴重で、快いものを選ぶにすぎない。貧乏人とくらべて、消費する量は若干多いにすぎない。本来、利己的で貪欲だし、自分の都合だけを考えているのだし、自分が雇っている大量の人たちの労働から得ようとしているのは、飽くことのないつまらなぬ欲求、自分の欲求を満足させることだけなのだが、改良の結果、得られた生産物を、貧乏人と分け合うことになる。

25. しかし、金持ちは見えざる手に導かれて、地上の土地が居住者に平等に分けられていた場合とほぼ同じように、生活必需品を分配することになる。

26. 神は地上の土地を少数の領主に分割したとき、分け前を得られなかったように思える人たちを忘れたわけでも、見捨てたわけでもない。土地を得られなかった人たちも、土地の生産物に対する分け前を獲得する。

27.「人生にほんとうの幸福をもたらすものについていうなら、はるかに高い位置にいると思える人とくらべて、どのような点でも劣っていないのである。」ほんとうの幸福とは、じつのところ、ストア派の哲学社がいう俗世間の心配事から解放された状態なのだ。つぎに書かれていることを読めば、誰でもスミスに共感し、それまでの部分に感じていたわだかまりも吹き飛ぶだろう。「身体の安楽さと心の平静さという点では、身分に違いがあってもほぼ同じ水準にあり、道路脇で日向ぼっこをしている乞食も、国王が戦いとろうとしている安全な生活を確保できているのである。」

P74 ～ 89

［コメント］

道徳感情論の「さわり」の紹介を書き抜かせて頂いたが、「国富論」の前提となる「同感」を詳細に論じた「道徳感情論」を全く読まず、「市場原理主義」の元祖のようにアダム・スミスを取り上げる現代日本の不勉強は、国の行方を危うくする。本書は、経済や国の将来を考える人、論じている人にとって必読の書と考える。

本書を読んだ後、「国富論」「道徳感情論」「法学講義」のアダム・スミスの 3 部作を時間をかけてゆっくりと「理解」すべき。

― 2009 年 8 月 20 日林明夫記―